

少女と科学者の物語

あるとき科学者は不思議な少女に出会った。そのとても美しい少女は、女性器に加えて男性器をも備えた両性具有の体をしていたのである。

その構造は女性器のすぐ上に男性器がついているというものだったため、妊娠を心配した母親から今日まで男性器を用いた自慰を固く禁じられてきたのだと言う。

この話を聞いて科学者は思った。もしこの少女の協力が得られ、定期的に子どもを産んでくれるなら、深刻な少子化に歯止めはかけられなかったとしても、人類の滅亡という最悪の事態は回避できるかもしれないと...

近年、若者を中心に性的欲望を持たないアセクシュアル(無性愛)に加えて、子どもへの無関心が急速に広がり、人口が激減していた。そのペースは国家の財政維持というレベルを遥かに凌駕し、数世代後には滅亡の危機を迎える危険性さえあった。

この危機に対して、以前なら効果が見込めた出産に対する優遇策も、これらの人々には見向きもされない。また体外受精などの生殖技術に強制的に協力させることも、個人の尊厳を損なうものであり、倫理的に到底許されるものではない。

こうして決意を固めた科学者は、人類がいかに危機に瀕しているのかを熱弁し説得を試みたが、その提案に母親は激怒した。

しかし当の娘は科学者の提案を快く承諾し、自分に初めて明確な存在意義を与えてくれた科学者に甚く感謝し涙を浮かべた。

なおこの時が、娘が母親に逆らった初めての経験であった。